大本山永平寺

夏休み

「修行僧のみなさんに休日はあるのですか?」と時々お参りの方に尋ねられ、「ございません」と答えると、驚かれることがあります。

修行内容がゆったりとした日が設けられていたり、一休みすることはありますが、私たちには何もしない「完全休日」はありません。

日々の修行の積み重ねが大切なので、修行を「休止」することはできません。

私たちに休みはありませんが、今月下旬から子どもたちが心待ちにしている夏休みが始まります。

普段、学校ではできないさまざまな経験をお子さんや、お孫さんにさせてあげるよい機会かと思います。

文化、歴史の学びの場として永平寺は宝庫です。ぜひご家族で来て観てください。必ず研究課題が見つかると思います。

また、永平寺には伝道部という部署があり、お参りの方に堂内の説明や歴史についてのご案内を担当の修行僧が勤めておりますので、入館後は「勧化室(かんきしつ)」という大広間にお立ち寄りください。

大本山總持寺

み霊祭り

七月十七日から十九日にかけて、み霊祭りが、開催されます。み霊祭りは、大駐車場での盆踊り大会と仏殿前参道での万灯供養会を合わせて行います。今回で六十五回目となるこの行持は、横浜大空襲の犠牲者と、鶴見での鉄道事故の犠牲者を慰霊するために始められました。初日の施食供養の時間を除き三日間とも午後五時三十分から午後八時まで行われ、例年延べ三万人を超える人出があります。現在ではすっかり横浜鶴見の夏の風物詩として定着しました。

特に盆踊り大会は、電飾や花火が会場を華やかに演出し、大変なにぎわいをみせます。普段修行に励んでいる若い僧たちも、この時ばかりは浴衣姿になり、櫓の上で、あるいは参加者の輪に混じって踊ります。一方、万灯供養会は、無数の灯火が道行く人びとをほのかに照らし出し、とても厳かな雰囲気に包まれます。

このみ霊祭りを通じ、訪れる多くの人びとに本山に親しみを持っていただくことはとても大きな意味があります。また実際に地域交流の大切な役割も果たしています。

み霊祭りの企画運営は、三松会という修行僧たちの自主組織が主体となって行います。準備に苦労は伴いますが、大勢の市民が、厳かで楽しいひとときを過ごしていただけることは、修行僧たちにとっては、何よりも嬉しいことです。

大本山總持寺／045-581-6021

曹洞俳壇

選・村松五灰子

小仏の天蓋なりや貝母草

愛媛県　明庭　和子

評　貝母は百合科の多年草。四、五十センチくらいの高さで、花は薄緑色、親指ほどで下向きに咲く。それを作者は小仏さまの天蓋とみた。新鮮な発想は明るく優しく信心の心は篤い。心のこもる十七文字。

鰊鍋むかし栄華の箱階段

秋田県　小田嶌恭葉

評　昭和初期まで鰊漁に湧いたその頃の鰊御殿などが北海道に記念として残されている。その鰊景気の頃の建物か、古色をおびた箱階段。鰊漁に秋田や山形などから「やん衆」と呼ばれた季節労働者。そんな往時を偲びながらの鰊鍋。簡潔で句の容がよい。

◆料峭の斧の半島灯の貧し　北海道　福島　眞也
◆天平へ誘ふ蕊や白牡丹　山口県　中井　清子
◆牡蠣むきをせし日の母の頭巾かな　岩手県　阿部　凞子
◆花街の三味の音もるる春障子　群馬県　高橋　正子
◆啓蟄や鍬のくさびを打ち直す　宮城県　木村とみ子
◆別れても子は鍬や母子草　新潟県　大橋　恒次
◆九十の母が作しり桜餅　北海道　池田　雨郷
◆春めくといふは人恋ふ心とも　佐賀県　池内　淳子
◆春灯校舎の中のひとところ　静岡県　渥美ふき子
◆顔見せに寄れば留守なり蓬餅　静岡県　土屋　君女

＊選者吟

夏潮に石投げ過去は帰らざる

五灰子

＊作句小見

大本山永平寺。そこにある一つの碑に三人の句があります。

殊にこの御法の梅の早きかな　永平雪庵

永平寺第七十三世貫首。熊澤泰禅（雪庵）

今も尚承陽殿に紅葉見る　虚子

雪深く仏も耐えて在しけり　柏翠

伊藤柏翠を通じて熊澤禅師と虚子の交流がありました。私は柏翠の末弟子でした。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

地震のたびに隙間増えゆく古き家のガラス戸ゆすり風唸るなり　岩手県　**阿部　凞子**

評　東日本大震災後も大きな余震が続く被災地の悲鳴が聞こえてくるようだ。隙間風は寒々しい上に恐ろしい音まで立てて不安を煽る。同じ作者に「避難所の駐車場にまさかの津波きて畑は捨てらる踏みにじられて」の一首もあった。

もう付いて来ないでと言う一年生もう道草も出来るよと聞く　宮城県　**畠山　惠**

評　一年生の言葉から、ほんの少しの日々にしっかりと成長したことを実感した作者。子を見守る眼差しが適切だ。東日本大震災の被災地の一年生、どうか健やかに育って欲しい。

◆さみどりは色の始まり刻々と芽ぶきにけむる疎林見て立つ　東京都　長谷川　瞳

◆あさり売る車止まれば潮の香が春陽の道にあわくただよう　静岡県　岡田ときえ

◆元気だね歩く背後に友の声並べば自ずと歩みの揃う　愛知県　深谷ハネ子

◆若くして逝きたる夫は満鉄人（まんてつマン）われに残せし線路長かり　福島県　大波シュク

◆氷雨降る広場に消防訓練の号令激し集散幾度　静岡県　高尾　善五

◆森林に似せし広場は冬の顔幼蹴り上ぐる落ち葉匂ひぬ　岐阜県　後藤　進

◆折々に頭痛目眩のすることは神のはからひ星空仰ぐ　愛知県　前田　操

◆起きぬけの熱き茶のどを下りゆき臍のあたりで行方くらます　大阪府　西口　節子

◆開城の一番太鼓に迎えられ心ふるえし姫路城かな　北海道　石山　マサ

◆ふるさとの野山に遊びゐし頃よやさしい時間流れてゐたり　北海道　池田　雨郷

＊選者詠

猪に堀り返されし黒土の盛り上がる春の湿りを帯びて　**ちづ**

＊作歌小見

頭痛や目眩を神のはからいと捉える前田さんは百歳の方。この境地の謐（しず）けさに感動を覚えます。長谷川さんの「さみどりは色の始まり」という大胆な季節感の把握にも惹かれました。丁度のその時候の箱根山での嘱目詠（しょくもくえい）が拙歌です。